

# 人生劇場

## 映画文学人生論

原作：尾崎士郎（1933年）「都新聞」

映画：『人生劇場 飛車角』 監督：沢島忠（1963年）

出演：飛車角 鶴田浩二  
おとよ 佐久間良子  
宮川 高倉健  
吉良常 月形龍之介

脚色：直居欽哉  
撮影：藤井静  
音楽：佐藤勝  
青成瓢吉 梅宮辰夫

ああ、昨日は少年、今日は白頭

尾崎士郎『人生劇場』のうち「青春篇」と「愛欲篇」を私が読んだのは小学六年生のころだ。叔父の部屋にあったのを盗み読みし、見つかると怒られるというスリルも加わって、ドキドキしながら読んだ。おかげで、文学とは面白いものだという印象が残った。その印象は今も消えていない。

主人公の青成瓢吉は三州吉良で家産が傾きかけている辰巳屋の坊っちゃん。父親には「何でも無鉄砲なことをしなきゃあ、えらくなねえぞ！」と、育てられた。幼なじみのおりに好かれ、落ちぶれた侠客の吉良常の世話になる。

中学をクビになった黒馬先生と上京し、早稲田に進学すると、学園騒動に火をつけて、中退するが、柳水亭のお袖にもてる。新進作家になると、女流の小岸照代とくつついたり、別れたりする。

行きづまって外房州の漁村へ行き、波打ち際を歩いているうちに、竹野原文一という落ちぶれた小説家と知り合う。「ああ、昨日は少年、今日は白頭」と竹野原は言った。彼の顔を見ていると、自分の未来を見せつけられたような気がした。

竹野原、吉良常、黒馬先生——みんな落ちぶれて落魄した敗残の翳をただよわせている。青成瓢吉、夏村大藏、高見剛平、新海一八、横井安太、吹岡早雄ら無鉄砲な若者たちも、いずれはそうなる。政治ブローカーの高見剛平は怒鳴った。「敗残の夢を知らぬやつに、人生がわかるか！」。



# 人生劇場

映画文学人生論

『人生劇場』の主題はそのような落魄のドラマで、人生は誰もがそうなる運命にあるという予感を小学六年生の私に抱かせた。

ところが、沢島忠監督の『人生劇場 飛車角』を観ると、主人公は飛車角（鶴田浩二）、副主人公は宮川（高倉健）で、まったく違う話になっている。青成瓢吉（梅宮辰夫）も登場人物の一人ではあるが、影が薄い。

これは映画が『人生劇場』でも青春篇や愛欲篇ではなく、残侠篇を原作としているためである。

義理がすたれば この世は闇だ

なまじ止めるな 夜の雨

という村田英雄の主題歌が評判になり、やくざ映画ブームのはしりとして大ヒットした。月形龍之介が演じる吉良常はいかにも吉良仁吉の血統をひく侠客らしくかつこいいが、原作の吉良常は足袋もはかず、冬でも素足で歩いて、「ぼんちたびなし」と言ってはやしたてられような男だ。

『人生劇場』はこれまでに十四回映画化されている。「ああ、昨日は少年、今日は白頭」という落魄の作家竹野原文一は佐分利信監督の『人生劇場 第一部 青春愛欲篇』で千田是也が演じている以外には出番を与えられていないようだ。

敗残の夢よいつまで青瓢